

を語る 1

小千谷市(新潟県)

小千谷市長 谷井靖夫

創造、伝統、自然を受け継ぎ 本当の住みよいまちへ

はじめに

小千谷市は新潟県のほぼ中央に位置し、日本一の大河・信濃川が市域を東西に二分する、河岸段丘の眺望が素晴らしい、四季折々の自然が豊かな市です。昭和29年3月に市制を施行し、平成16年には市制施行50周年を迎えました。しかし、その年の10月23日に発生しました新潟県中越地震は、尊い人命を奪い、豊かな自然を破壊するなど市内全域に甚大な被害をもたらしました。

震災から本年度で5年が経過し、これまでに全国の皆さまから多くのご支援や励ましを頂き、幾多の困難を乗り越えることができたことに、心から感謝とお礼を申し上げます。また、第64回国民体育大会・トキめき新潟国体のパレーポー

ル競技成年男女6人制の開催地として、選手・役員関係者を多数お迎えすることができました。大会を盛り上げていただくとともに、災害から立ち上がった市民の元気な姿を見ていただき、復興の節目の年にふさわしい素晴らしい大会となりましたことを、関係各位に深くお礼申し上げます。

歴史と伝統のまち

本市は、信濃川に沿って栄えたことを、数多くの遺跡が物語っています。小千谷に集落が形成されたのは平安時代で、後に縮の生産が始まり「小千谷縮」として名が知られ、繁栄していきました。

時は移り昭和30年、小千谷縮はその伝統的な技術を評価され、国指定の重要無形文化財第1号の指定を受け、大切にその技が受け継

がれてきました。さらに、このたび小千谷縮は越後上布とともに工芸技術部門において、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。その技術と品質が高く評価されたことは、大変喜ばしい限りです。

また、歴史に目を向けますと、幕末には北越戊辰戦争の戦場となっています。朝日山古戦場や船岡公園西軍墓地をはじめ、長岡藩家老の河井継之助と西軍軍監の岩村精一郎が会見した慈眼寺など、北越戊辰戦争を語る上で欠かせない貴重な史跡が残っています。

自然と伝統を生かした 創造性豊かなまちづくり

昭和55年3月に市民憲章として「小千谷市民のねがい」を制定し、この基本理念に基づき、都市像である「創造、伝統、自然が織りな



ユネスコの無形文化遺産登録となった小千谷縮の技の1つ「雪さらし」

ける本市独自の産品を広く外に向けて売り込むことや、既存の産品に付加価値をつけた、競争力のあ

る新たな産品創造に努め、農・工・商共に栄え続けるための支援を進めています。

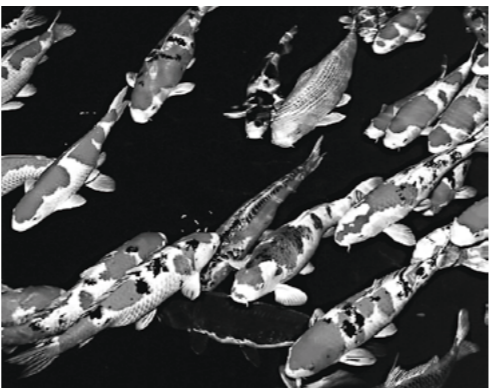
③交流・定住促進

田舎暮らしを通じて、農作物や花を育て地域住民と触れ合い、のどかな時間を過ごす。そういった田舎暮らし体験の人氣が高くなっています。気軽に訪れることのできる田舎が少ない今日、都会の人たちには、「おぢやクラインガルテンふれあいの里」での暮らしを通じて地域の人たちと交流を深めていただきたいと思っています。そして、やがては定住へのきっかけとなればと願っています。また、毎年都会から多くの子どもたちが、農業生活体験で本市を訪れており、小千谷の家族との交流を深めています。

本市も年々人口が減少しており、活気あるまちづくりには、若者の定住が必要不可欠であり、定住のための支援も推進しています。

④防災のまちづくり

新潟県中越地震で頂いた全国の皆さまからのご支援に感謝する



泳ぐ宝石 ニシキゴイ

こうした環境の中で私は、子育て支援、産業振興、交流・定住促進、防災のまちづくりを重点的に進めています。

①子育て支援

子育てで最も大切なものは、親の愛情で子どもを温かく包んであげることです。しかし、それは親にとっては大変な努力を必要とします。働く女性が増えた今、子育てと仕事の両立はなかなか難しくなってきました。社会で活躍しているお母さんたちが安心して子どもを産み、育てることができるよう支援を進めています。

②産業振興

本市を豊かにするために、富を外から取り込み蓄えることが必要です。農業・工業・商業などにお

とともに、貴重な経験を生かし市民の防災意識の高揚を図り、災害に強いまちづくりを進めています。

おわりに

東洋経済新報社が発表した2009年版の調査によりますと、本市は全国806市・区中、住みよさランキングで45位、新潟県内で1位となっています。大変素晴らしい評価を頂き光栄に思っています。

地方自治体を取り巻く環境は、少子高齢化の進展、世界経済の激変、社会構造の急激な変化などによって、市民生活に大きな影響を及ぼしています。山積する課題が多い中ですが、先人たちが守り、繁栄させてきた自然や伝統を受け継ぎ、本当の意味での住みよいまちづくりを今後も進めていきたいと考えています。

プロフィール

- ◆ 面積 155・12km²
- ◆ 人口 3万9551人
- ◆ 世帯数 1万2542世帯

〔将来都市像〕創造、伝統、自然が織りなす誇りあるまち おぢや

〔まちの特徴〕新潟県の中央に位置し、大河信濃川が市域を東西に二分する形で流れており、河岸段丘の多い自然豊かな都市

〔特産品〕小千谷縮、へぎそば、魚沼産コシヒカリ、ニシキゴイ、地酒

米菓

〔観光〕総合産業会館サンプラザ、錦鯉の里、湯どころちのみ里、船岡公園、慈眼寺河井継之助・岩村精一郎会見の間

〔イベント〕おぢやまつり、おぢや風船一揆、牛の角突き、片貝まつり



小千谷市長 谷井靖夫



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

を語る 2

やまと 大和市(神奈川県)

大和市長 大木 哲

「健康創造都市」を目指す 日本で一番「コンビニエンスストアのような自治体」

コンビニエンスストアの ような自治体とは

大和市は、神奈川県ほぼ中央部に位置し、都心から40km圏内にある南北に細長く、丘陵起伏がほとんどない平坦な地形の市です。市内には、鉄道網が整備され、



毎年5月に開催され、多くの市民でにぎわう「大和市民まつり」

東京都心や横浜中心部へのアクセスも優れていることから、住宅を中心としたベッドタウンとして発展してきました。

本市の特色を店舗に例えれば、大都市のようなデパートでもなく、観光都市のような専門店でもなく、日用品が何でもそろったコンビニエンスストアのような自治体といえます。何しろ、鉄道3路線8つの駅のほか、市立病院、スポーツセンター、大規模緑地、河川、下水処理場、ごみの焼却場、斎場(火葬場)、さらには、滑走路を有する厚木基地まであります。その上、東名高速道路と東海道新幹線が市を貫き、テレビドラマの舞台となった閑静な住宅街から、公営住宅が多く存在する地区まであります。そして、市内には約70カ国の外国人の方が住んでいるという、市

民の方々も含めて、バラエティに富んでいる市といえます。

健康創造都市(人・まち・社会の健康)を目指して

総合計画に掲げるキーワードである「健康」とは、心身の健康を含む「人の健康」に、安全で快適な生活を営むための「まちの健康」、活力に満ちた地域社会を目指す「社会の健康」を加えた3つの健康領域から形成されています。

「人の健康」としては、「一人ひとりがいつまでも元気でいられるまち」「子どもが生き生きと育つまち」。「まちの健康」としては、「安全と安心が感じられるまち」「環境を守り育てるまち」「快適な都市空間が整うまち」。そして「社会の健康」として、「豊かな心を育むまち」「市民の活力があふれるまち」を個別目



夏の風物詩となっている「神奈川大和阿波おどり」

標として掲げ、多くの施策は、健康をキーワードとして関連させ、効果的な市政を展開しているところ。

これからの課題

私は、わが国における今後最大の課題は、少子高齢化の急速な進展への対応であると考えており、少子化と高齢化に共通した対策のほか、それぞれの対策も講じて

いくべきであると考えています。

高齢者対策として、お年寄りが健康を維持し、安心して日常生活を送り、市内を移動できるように、高齢者医療、介護、コミュニティバスなどの施策が挙げられます。一方、少子化対策としては、安心して子育てができるために、妊婦健康診査、保育、小児医療、放課後児童クラブなどの施策を積極的に進めてきているところです。

特に、子どもたちには、目標を持つことで成長できる環境をつくってあげるために読書の習慣が重要と考え、学校図書室の整備や読書に関する活動などに力を入れていきたいと考えています。

目標の実現に向けて

目標である「健康都市 やまと」を実現するためには、何より、市民の方々のご協力が必要なのは言うまでもありません。幸い、本市では、自治会をはじめとする多くの団体が、行政への協力に惜しむことなく力を貸してくださっている実績があります。その力をお借りしながら、目標実現に向けて前進しているとこ

最近の話題

本市では、「健康創造都市」を実現するために、環境に対する施策にも力を入れています。電気自動車の導入などはもちろんのこと、電気を動力とする自動車などの軽自動車税の全額免除制度を、全国で初めて導入しました。さらに、太陽光発電システムへの補助金交付制度や、電気事業者へ売電する市民の方々への、売電量に応じた補助金交付制度も創設しました。

また本市は、本年2月1日、市制施行50周年を迎えました。昭和34年に、人口約4万人で誕生しましたが、現在では22万人を超える市民が暮らす都市へと成長しました。本年はこのことを記念し、多くのイベントを開催してきました。中でも、本市で盛んな女子サッカーに関するイベント、「なでしこリーグ公式戦」「なでしこプレーヤーによるサッカースクール」では、本市在住のトッププレーヤーの活躍や親切な指導に、多くの市民の方々が歓声を上げました。また、多くの外国人がお住まいの本市ですが、これまで、海外の都市との友好関係を結んでいま



春には花見客で溢れる千本桜地区の桜並木

プロフィール

- ◆ 面積 27.06 km²
- ◆ 人口 22万5650人
- ◆ 世帯数 9万6373世帯

〔将来都市像〕「健康創造都市 やまと」

〔まちの特徴〕都心から40km圏内にある住宅都市。健康をキーワードとした行政を推進

〔特産品〕湘南梨



大和市長 大木 哲



〔観光〕千本桜、引地川公園泉の森・ふれあいの森・ゆとりの森、大和市郷土民家園
〔イベント〕大和市民まつり、神奈川大和阿波おどり、やまとプロムナード古民具骨董市

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

住みよく、持続可能な「みんなが誇りを持てるまち、四日市！」へ

公害のまちから住みよいまちへ

四日市市は、三重県の北部に位置し、西は鈴鹿山脈、東は伊勢湾を望む自然にも恵まれたまちです。その自然風土に裏打ちされた紫泥急須や土鍋に代表される萬古焼、鈴鹿山脈の豊かな伏流水を利用した地酒、かぶせ茶に代表される伊勢茶などの産地となっています。

また、四日市港は、明治32年に開港場の指定を受け、羊毛、綿花の輸入港として栄え、紡績業が発展し、戦後は特定重要港湾の指定とともに、昭和30年代前半から日本で最初の石油化学コンビナートも形成されました。このように本市はまさに日本の産業発展の縮図とも言えるべき展開をしてきました。しかし、急激な重化学工業化の

進展は、大気汚染など深刻な産業公害も発生させました。その中で、本市は国に先駆け、健康被害者救済や硫酸化物の総量規制などを実施しました。また、8次にわたる公害防止計画に基づき、下水処理施設、公園・緑地の整備や公害防止設備の導入など、市民・企業・行政が一体となって環境改善に取り組んできました。その取り組みが評価され、国連環境計画(UNEP)から、環境の保護および改善に功績のあった環境保全都市として、「グローバル500賞」を受賞しました。

四日市公害として教科書に掲載されたマイナスイメージから、本市への転勤の際、家族から「ついて行きたくない」と言われたものの、実際住み始めると、大変住みやすく、今度は「離れたくない」と言われるようになった。この新規産業に加え、コンビナートの夜景や地場産業を活用した産業観光にも取り組んでいきます。

次に、市民力の活用によるまちづくりの視点では、市民活動団体の発掘や財政支援によって、市民活動を活性化させ、行政では行き届かない部分について、市民の手による地域再生や地域コミュニティの充実を積極的に図っています。具体的には、全国に先駆けた「青色回転灯」に代表される地域防犯パトロール活動や、地域のきめ細かな移動ニーズをとらえた「生活バスよっかいち」などが挙げられます。また、中心市街地に位置する歴史的建造物を改修した「すわ公園交流館」における市民手作りのさまざまな交流イベントなど、多くの分野で市民力によるまちづくりが広がりをみせています。今後は、市民の自主的、主体的なまちづくり活動をより活性化するため、新たな方策を展開していきたいと考えています。



臨海部 100万ドルの夜景

一方、文化やスポーツによる元気なまちづくりにも取り組んでいます。中心市街地の空き店舗を活用して、人々が集い、文化活動の発表、体験や交流のできる「文化

れたという話をよく耳にします。

このように、本市の住みよさは、外から移り住んだ人には評価されるものの、公害による負のイメージを抱いている人も依然として多いことから、本市のよさや魅力を広くアピールしていくことが必要だと感じていました。そこで本年10月下旬の2日間、東京上野恩賜公園において、津市と合同で「城下町『津』と宿場町『四日市』と銘打ち、シテイセールスイベントを実施しました。今後も積極的に情報発信しながら、市民みんなが誇りを持てるまちを目指して、新しいまちづくりに取り組んでいきます。

21世紀の持続可能なまちづくりに向けて

今日、本格的な少子高齢社会を迎え、地方分権の進展や市民活動

の駅「事業を開始します。また、すべての世代が健康づくりの一環として、ウォーキングや自転車をはじめ、あらゆるスポーツを通じて、心身共に元気になる「スポーツのまちづくり」も推進しています。

総合計画による戦略的なまちづくり

現在、本市では、平成23年度を初年度とする新たな総合計画の策

定に取り組んでいます。その過程では、さまざまな分野の市民や議会の参画を得るとともに、職員の自覚と能力の底上げを図りながら、市民が誇りを持てるまちづくりに向けた戦略的な計画づくりを進めています。今後の社会構造の変化を的確にとらえ、都市経営という視点に立ち、元気・魅力・安心を備えた、夢のある総合計画づくりに努めていきたいと考えています。

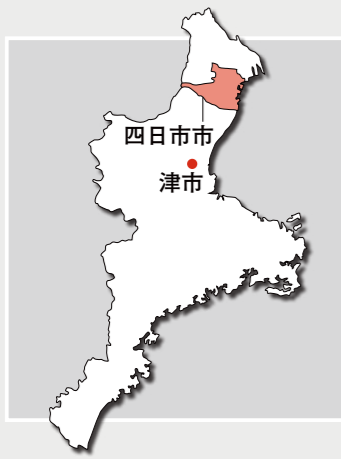
プロフィール

- ◆ 面積 205.53km²
- ◆ 人口 31万4577人
- ◆ 世帯数 12万6976世帯

- 〔将来都市像〕人と文化と自然を育む活気あふれる港まち四日市
- 〔まちの特徴〕三重県下第1位の人口、工業出荷額2兆6852億円(全国で13位) 四日市港はスーパー中枢港湾の指定
- 〔市町村合併〕平成17年2月桶町を編入合併



四日市市長 田中俊行



- 〔特産品〕萬古焼(土鍋全国シェア80%)、伊勢茶、養蚕ハマグリ、日永うちわ、大矢知手延素麺、メロン、なが(永)餅、四日市とんてき
- 〔観光〕宮妻峽、四日市港ポルトビル、智積養水、伊坂ダムサイクルパーク、四日市市ふれあい牧場、吉崎海岸
- 〔イベント〕水沢新茶まつり、四日市萬古まつり、大四日市まつり、四日市花火大会、楠健康ふれあいフェスタ

※面積は国土地理院「全国都府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。



「こにゅうどうくん」や茶娘と共に(10月 東京上野イベント)

自立と支え合いのまちづくりを目指して

はじめに

八幡市は、京都市と大阪市の中間に位置し、交通の要衝にあります。かつての街道は、今では国道1号、第二京阪道路、京滋バイパスへと変わり、交通利便性の高い、将来性豊かなまちです。

昭和50年前後の日本住宅公団による男山の開発が主因となって、大都市近郊のベッドタウンとして全国屈指の人口急増を経た後、現在の人口7万4000人の八幡市



桂川・宇治川・木津川の三川合流域

ができました。

地勢は、三重県・奈良県に源を発する木津川・琵琶湖からの宇治川・京都市内からの桂川の三河川が合流し、淀川となる景勝の地で、古くから水運の中継点でもありました。

また、徒然草にも記され、日本三大八幡宮の一つである石清水八幡宮の門前町として発展してきました。

市域の木津川には、「流れ橋」と呼ばれ、親しまれている日本最長の木橋、上津屋橋が架かっています。全長は365.5m、幅員は3.3mで、73基の橋脚で支えられており、増水時には橋脚を守るため、ワイヤーロープでつながれた橋板と橋げたが自然に外れて流れるという独特の構造で、時代劇のロケーションとしても利用されています。

生涯に約1300件もの発明を

したといわれているトーマス・アルバ・エジソンも八幡と関係があります。1879年に八幡の竹(真竹・マダケ)に出会い、それを炭素化したフィラメントを使用して白熱電球を発明しました。

自然と人とを紡ぐ

淀川三川

桂川、宇治川、木津川の三川が合流する淀川三川合流域は、雄大な景観を誇る自然豊かな地域です。豊臣・明智の戦いや徳川・石田の戦いなど、時代の行く先を決める戦いが繰り広げられてきた土地でもあり、多くの自然・歴史資産が残されています。

この自然景観と交通利便性の魅力を全国に発信する「淀川三川合流地域づくり構想」に基づき、「淀川三川ふれあい交流」「背割堤七夕まつり」や、関連事業の「八幡桜まつり」



250本のソメイヨシノが1.4kmの桜のトンネルをつくる、三川合流部の背割堤

りを開催しています。今後は、水辺のにぎわい創出のための「地域間交流」モデル地区の一つとして、自然・歴史文化環境を保全しつつ、国、府、市町の行政の枠組みを超えた地域づくりをしていきたいと考えています。

バリアフリーのまちづくり

市民が住み慣れた八幡で、高齢者になっても気持ちよく暮らすことができるよう、健康づくりと施設や設備のバリアフリー化を進めています。

それに伴い、「八幡市駅周辺及び

市役所周辺」と「橋本駅周辺」の2カ所を重点整備地区に設定しました。

それぞれの公共施設、公共的な施設、生活関連の施設および経路について、短期(平成22年度まで)、中期(平成23年度～27年度)、長期(平成28年度以降)と整備目標の時期を示し、整備を進めています。

本年度は、京阪八幡市駅のエレベーターの設置に着手し、公民館などの施設のバリアフリー化を進めます。

道路交通網の結節点として

本市は、名神高速道路、京滋バイパス、第二京阪道路などが整備され、広域幹線道路網の結節点となっています。京都市と大阪市と、



貞観元年(859年)、平安京鎮護のため建立された重要文化財の石清水八幡宮本殿

大阪湾と日本海の舞鶴をつなぎ、名古屋、神戸、岡山までを2時間以内でつなぐ結節点です。近年は、京滋バイパス・国道478号の開通により、淀川を横断する新たな東西軸が形成されたことで地域のポテンシャルが大きく向上しています。

この道路交通網により、市東部に展開する工業団地を中心に工業系、流通系の土地利用が拡大し、京都府南部における流通の拠点となりつつあります。市としても高齢化の進展などに伴う市道のバリアフリー化を進め、安全な生活道路整備を進めます。

「美しいまちづくり」まかせて!

本市は、平成14年4月に「環境自治体」を宣言しました。

それにふさわしく、市民の皆さんや事業所が道路などの公共の場を指定して、清掃活動に取り組みボランティア活動を支援する「美しいまちづくり まかせて!」事業を展開しています。

「まちの美化は私たちにまかせて!」と市民の皆さんが公園や歩道などの面倒を見てくださっており、

行政と役割を分担して、協働でまちの美化を進めています。

八幡の歴史と石清水八幡宮

京都の南西、男山山頂にある石清水八幡宮は、全国に約4万社あるという八幡神社の中で、大分県の宇佐八幡宮、神奈川県鶴岡八幡宮と並んで三大八幡宮の一つに数えられています。また、徒然草の中にも、このように記されています。「お参りに来た仁和寺の法師

プロフィール

- ◆ 面積 24・37km²
- ◆ 人口 7万4205人
- ◆ 世帯数 3万637世帯

〔将来都市像〕自然と歴史文化が調和し人が輝くやすらぎの生活都市

〔まちの特徴〕

1. 木津川、宇治川、桂川の三川が、石清水八幡宮の鎮座する男山のふもとで合流して淀川となる緑と水辺に恵まれたまち
2. 道路の東西軸、南北軸の結節点



八幡市長 明田 功



〔特産品〕茶、ナシ、タケノコ、近郊野菜、走井餅、いろいろ、源氏巻、八幡巻

〔観光〕石清水八幡宮、松花堂、背割堤、流れ橋、飛行神社、円福寺、正法寺、単伝庵(らくがき寺)、エジソン記念碑

〔イベント〕背割堤桜まつり、男山桜まつり、石清水祭、飛行神社年次祭、円福寺万人講、高良神社例祭(太鼓まつり)、松花堂大茶会

※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。

「市民総ヘルパー構想」市民で支える福祉のまちづくり

はじめに

安芸高田市は、平成16年3月1日、旧高田郡の似通った中山間地域の6町(吉田町、八千代町、美土里町、高宮町、甲田町、向原町)が対等合併し誕生した、広島県で14番目の市です。



勇壮な舞で観客を魅了する神楽「八岐大蛇(やまたのおろち)」の一場面

中国山地のほぼ中央に位置し、高齢化率が32%で県下でも少子高齢化の進んだ地域です。市の中心となる吉田町は、戦国武将・毛利元就の生誕地でもあり、古くから城下町として栄えました。平成9年、毛利元就誕生500年を記念し、NHK大河ドラマ「毛利元就」が放映され全国各地から注目されたことは、記憶に新しいところです。元就の居城である吉田郡山城は、日本一の規模の薬研堀を有し、中世の山城としては日本でも有数の大規模な城であったといわれています。そうしたことから、平成18年には、日本100名城の一つに選ばれました。

また、本市は伝統的文化の宝庫でもあります。神楽や田楽を代表とする郷土芸能は、広島県内はもとより、遠くブラジルなどの海外でも広く紹介されています。特に、テン

ポの速い安芸高田の神楽は、若者を魅了し根強い人気を誇っています。さらに、日本を代表するスポーツであるサッカーJ1のサンフレッチェ広島、湧永製薬ハンドボールチームの練習拠点施設を有し、スポーツの盛んなまちでもあります。

まちづくりの課題

高齢化が進んだ本市では、お年寄りを支える人材の確保と、地域でお年寄りを支える仕組みづくりが急務です。少子高齢化が進む中、こうした地域での取り組みを進めるためには、若者定住対策が最重要課題であると考えます。

本市の資産である、歴史、文化芸能、スポーツの有効活用を図ることとはさることながら、医療、教育、保育、出産に掛かる費用の低減や、学校教育のレベルアップ、子育て支

援、就労対策が大切と考えます。また、お年寄りの自立対策としては、買い物、介護、医療やスポーツなどに参画するための移動手段の確保や、スポーツなど生涯学習機会の提供による健康維持の施策が大切です。

徹底した行財政改革の推進

昨今の社会状況下、将来にわたって健全な行政運営をしていくためには、行財政改革は必須の課題です。合併により拡大した職員数、箱物の施設管理などの見直しを、普通交付税の合併特例加算措置が終了する平成26年までに行う必要があります。

市民サービスの低下を招かないことを前提に、退職者の補充を減少とした職員数の適正化や水道など

の事務の包括民間委託を視野に入れた検討が必要でです。また、現在の社会状況や費用対効果を踏まえた徹底した事業の見直しが必要であると同時に、自主防災、自主福祉、自主介護などの市民の協力が、行政コストの低下には不可欠であると考え、市民の皆さまの善意の協力をお願いしております。

新交通システム

本市では、市民の皆さま、特に移動手段を持たないお年寄りの移動を保障するため、10月から「新公共交通システム・お太助ワゴン」をスタートしました。市民の移動を従来の交通手段(バス・タクシーなど)に合わせるのではなく、反対に市民の移動ニーズに交通手段を合わせる



10月より運行を始めた新公共交通システム「お太助ワゴン」

抜本的な改革であります。原則ドアからドアへの運行とし、市民の利便性を図るとともに、市内中心から比較的遠方の地域については、地域での自主運行を取り入れ、市内のどこからスタートしても1時間以内で中心部に行けるサービスとしました。現在は通院、買い物を中心としていますが、来年からは、市民の方が文化・スポーツ行事などに気軽に利用できるシステムとすることを考えています。

このシステムにより、市民の生活の幅の拡大、健康増進、消費の拡大を図れるものと期待しています。

市民総ヘルパー構想

「自主福祉」「自主介護」への市民の皆さまの協力がこれからのまちづくりに必要です。そのため、本市では前年度から「市民総ヘルパー構想」を掲げ、市民の福祉に対する知識の向上を図っています。職業としての知識ではなく、協働のまちづくりを担う一員として活躍をお願いするものです。

本市は地域が広範なため、行政が到達するまでの補完をお願いするものです。行政が業務を怠るわけではありません。市民の皆さまに

負担を掛けることなく、できることをお願いする仕組みです。例えば、AEDの使用法の習得や患者の移動などの協力は行政にとって大変助かります。構想を掲げ半年になりましたが、およそ200名の市民の皆さまに生活介護サポーター研修の受講をいただいております。

今後さらに受講者を増やし、市民の皆さまの関心度を高めていく必要があります。



生活・介護サポーター養成講座にて、グループでの討議に熱心な受講者

プロフィール

- ◆面積 537・8km²
- ◆人口 3万2243人
- ◆世帯数 1万3266世帯
- ◆(将来都市像) 輝く・安芸高田(まちの特徴) 中国山地の中央に位置する典型的な「中山間地域」であり、高齢化率(32・2%)が高いことが特徴です。豊かな自然に恵まれ、毛利元就を中心とした歴史、神楽・田楽などの郷土芸能やサッカー、ハンドボールなどスポーツの盛んなまちです。
- ◆(市町村合併) 平成16年3月1日、旧高田郡6町(吉田町、八千代町、美土里町、高宮町、甲田町、向原町)が合併し誕生した。



安芸高田市長 浜田一義



※面積は国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」に、人口・世帯数は「住民基本台帳」による。